

アウグスティヌスとプロティノス

—ミラノ体験とオステシア体験をめぐって—

金井多津子

(1)

アウグスティヌス(以下 Aug. と略記)は、*Confessiones* (以下 *Conf.* と略記) 第Ⅹ巻第40章65節において、自己の神探求の道程を回想し、被造物の世界の遍歴を経て自己の内面へという道筋を示している。そして、時に神によって自己の心の奥底へと引き入れられ、えもいわれぬ甘美を味わったが、それは持続せず、再び通常の生活に引きずり込まれるのが常であった、と彼は叙述している。さらに Aug. は、*Conf.* 完成後、410年以降に著わされたとされる *Enarratio in Psalmum XLI* において、『詩篇』XLI にみられる〈Ubi est Deus tuus?〉という問いを取り上げ、自己自身に課している⁽¹⁾。この場合、Aug. にとって、〈Ubi est Deus tuus?〉という問いを投げかける根拠となっているのは、*Conf.* 第Ⅰ巻冒頭にみられる〈quia fecisti nos ad te et inquietum est cor nostrum, donec requiescat in te〉(下線筆者、この点は後にふれる)だということができよう。つまり、Aug. にとって、人間は神を求めべく神に向けて造られているのであって、*Conf.* 全巻の叙述が彼の神探求の過程を記しているものであり、神探求は彼の全生涯を貫くものであったと考えられる。こうした Aug. の神探求の過程が具体的に叙述されているのは、*Conf.* 第Ⅶ巻にみられるいわゆる「ミラノ体験」(第10章16節、第17章23節)、ならびに第Ⅸ巻にみられるいわゆる「オステシア体験」(第10章23—25節)である。以下、まず、これら両体験を、Aug. の叙述に即して検討することにした。

第Ⅶ巻第10章16節の叙述に従えば、Aug. は、*Libri Platonici* に触発され、神を求めようとして自己自身へと立ち返り、in intima mea へと入っていき、supra men-

tem meam に lux inconmutabilis を見た。その際、Aug. は、その光が通常の意味における光とはまったく別のものであることに気づき、神は創造者であるがゆえに superior であり、自己は被造物であるがゆえに inferior であることを悟る。しかも、彼は、lux inconmutabilis からの光線によってつき離され、自己の infirmitas aspectus を思い知らされるのである。この体験は、Aug. にとって、lux inconmutabilis を見たとはいえ、先の第Ⅹ巻第40章65章でいわれているような甘美なものではなく、むしろ、そこにみられる regio dissimilitudinis という言葉が示すように、神と自己との存在の次元の相違、ならびに自己の infirmitas を Aug. が自覚した点に、この体験の意味があると考えられるのである。

さらに、Conf. の同箇所においては、uidi qualicumque oculo animae meae, aspectus mei 等の表現が用いられていることが示すように、視覚になぞらえることによって、自己の内面への深化の道程が叙述されている。これらの表現のうちでとりわけ注目されるのは、aspectus という語であろう。先に述べたように、神探求がなされるべき根拠は、われわれ人間が神に向けて (ad te) 造られたことに求められる。したがって、ここで用いられている aspectus という語も、その〈ad+spicere〉という構造が示すように、神を求め、神に向っていくべきだという被造物としての人間のあるべき志向を表わし、この意味において、aspectus は Conf. 第Ⅰ巻冒頭の〈ad te〉と呼応していると思われる。ミラノ体験としてまとめられるのは、この第Ⅶ巻第10章16節と次にふれる同巻第17章23節である。この第10章16節では、Aug. の aspectus、つまり神への志向 (ad te) は intimus cordi へと向けられているのであって、enstase の方途がとられている。そして、この方途では神に到達しえないことを、ここで Aug. は自覚するに至るのである。

さらに第Ⅶ巻第17章23節において、Aug. は、神を求めて、gradatim に〈ab corporibus ad sentientem per corpus animam〉→〈ad eius (sc. animae) interiorem uim〉→〈ad ratiocinatem potentiam〉→〈ad intelligentiam suam〉という過程をたどって erigere し、〈peruenit ad id quod est in ictu trepidantis aspectus〉といわれている。しかし、ここでも自己の弱さのために斥けられ、通常の状態につきもどされたといわれているのである。この過程において、interior という語がみられ、しかも〈ad〉により示されている経過点は、細分化されてはいるものの、人間の心の

働きに関するものであること、ならびに再び通常の状態につきもどされたこととされていることからすれば、一見、先の第10章16節とまったく同じことが述べられているように見える。しかし、ここでは、第10章16節にみられる〈in intima mea〉というような自己の内面への志向を示す表現ではなく、〈erigere ad〉という表現が用いられていることに注目するならば、ここでの神探求の過程は、物的なものから精神的なものへといういわば上昇のイメージにおいて叙述されている、といえよう。

ここで、〈ad te〉という志向に関し、自己の内面への深化という方向が提示されながら、そこにさらに上昇のイメージが持ち込まれているのはなぜであろうか。そこには、神探求を遂行するにあたって、新たな方途を示唆しようとする Aug. の意図があるのではないかと思われる。つまり、神探求の過程においては、enstaseの方途を徹底させることが必要であるが、そこに創造者と被造物との越えがたい懸隔がある以上、それだけでは不十分であり、いわば acies mentis から supra mentem へと超越していく extase の方途が要請されてきていると考えられる。そして、この extase の方途が明確にあらわれてくるのが、Conf. 第Ⅷ巻第10章23—25節にみられるいわゆるオスティア体験だとみることができるのではないだろうか。

(2)

Conf. 第Ⅷ巻第10章23—25節は、全体の構成についても議論のあるところである⁽²⁾が、以下のようにとらえることができると思われる。まず23節においては、Aug. がモニカと〈qualis futura esset uita aeterna sanctorum〉という問題について対話を交すことが、体験の発端として提示される。次いで24節では、一人称複数形を主語として叙述が進められており、これは、Aug. とモニカがこの問題を実際どのように探求し結論を得たか、という過程が述べられていることを示すものと考えられる。だが続く25節では、〈si cui sileat.....〉と述べられており、ここでは cui という不定代名詞の与格が用いられ、体験の主体が特定化されない仕方で叙述が展開されている。このことから、25節は24節で述べられた体験が一般化されているものと把握されうるが、この一般化には、後にふれるようにより深い意味がこめられているように思われるのである。

このオスティア体験において、先のミラノ体験との関連で特に注目されるのは、

24節にみられる上昇の過程の叙述である。ここにおいては、先の第Ⅶ巻第17章23節でも用いられていた *erigere, gradatim* の使用がみられる。まず、*erigentes.....in id ipsum* という表現によって、ここでの上昇とは、神への上昇であることが示され、さらに *perambulare, ascendere, uenire, transcendere* という動詞を用いて上昇の過程が具体的に述べられてくる。そして、後にふれる *atingere* という動詞によってこの過程の究極が示されるのである。ここでは、さしあたって、ミラノ体験の冒頭にある *redire ad memet ipsum* に対応するような、自己の内面への深化をことさらに強調する表現はみられない。むしろ、Aug. とモニカの神深求の過程はもっぱら上昇のイメージで叙述されてくるのである。以下、この上昇の過程を、そこで用いられている動詞に即して検討してみたい。

まず、*perambulare* は目的語として *<cuncta corporalia et ipsum caelum>* をとるが、この場合、*gradatim* という副詞が付加されていることが注目される。つまり、Aug. とモニカの両者は、すべての物的なものを *gradatim* に通過していくのである。次いで *ascendere* が用いられ、上昇はさらに続くのであるが、この *ascendere* は、「神の御業」を目的語とする分詞 *cogitando, loquendo, mirando* によって修飾されている。この場合、先に指摘した *gradatim*、ならびにこれらの分詞、なかでも *mirando* に着目するならば、ここで述べられている上昇の過程においては、少なくとも物的可感的被造物に関する限り、いわば *uia eminentiae* がとられているといえよう。Aug. のこうした姿勢は、パウロの言葉 *<inuisibilia Dei per ea, quae facta sunt, intellecta conspicerent>* (*Rom. I, 20*) と軌を一にするものであり、Aug. 自身、このパウロの言葉を、たとえば先にふれた *Enarratio in Psalmum* XLI においても繰り返し用いているのである。⁽³⁾しかし、物的可感的被造物の世界には神は見い出されえないのであって、探求はさらに続けられていくのである。

ここでは、先に述べたように *enstase* の方途はことさらに主張されてはいないが、それは捨て去られたわけではない。叙述の順序に従えば、*ascendebamus interius*、さらに *uenimus in mentes nostras* という表現によって、自己の内面への志向が示唆されているのである。その限りにおいて、ここでは上昇の過程と内面への深化の過程とが相即しているととらえることができる。しかし、ミラノ体験で明らかにされた

ように、自己の *mens* に到達したからといって、そこで神探求の過程は終局を迎えるのではない。この24節においては、そのことが *transcendimus eas (sc. mentes nostras)* という言葉によって明確に示されてくるのである。つまり、Aug. とモニカは、*enstase* の道程をきわめたうえで、さらに自己の *mens* をも越えていくのであって、先の第Ⅶ巻第17章23節において示唆された *extase* の方途が、ここではっきりと打ち出されてくるといえよう。以上のことからすると、このオスティア体験の叙述においては、神探求に関し、上昇のイメージつまり *extase* の道程のうちに、自己の内へという *enstase* の方途が、一つの経過点として組み込まれていると考えられる。この点において、24節の叙述は、ミラノ体験に関する二つの叙述（第Ⅶ巻第10章16節、第17章23節）を総合したものととらえることができるように思われるのである。

24節の叙述によれば、こうして自己の *mens* を超越していくことによって、Aug. とモニカは、*sapientia* と同一視されている *regio ubertatis indeficientis* に〈*attingere*〉する。この *attingere* という動詞は *Conf.* 第Ⅹ巻第17章26節においても用いられている。そこでは、*memoria* に関する叙述において、*ego ascendens per animum meum ad te.....transibo.....volens te attingere, unde attingi potes* といわれ、*attingere* の目的語が *te (sc. Deum)* として明確に表わされている。こうした叙述と24節における *attingere* の使用とを考え合わせると、オスティア体験とは、Aug. とモニカが「神に触れた」ことを意味しているといえよう。この点で、オスティア体験は、*supra mentem* に存在する神をただ *videre* するに留まっていたミラノ体験から一歩踏み出したものととらえられるが、この一歩を可能ならしめたのは、ミラノ体験において *regio dissimilitudinis* の自覚から *enstase* の方途の限界を悟ったことであった。したがって、Aug. にとってミラノ体験とは、オスティア体験において神に *attingere* するに至るための里程碑であったと考えられるのである。

(3)

ところで、オスティア体験の叙述については、P. Henry の古典的業績 *La vision d'Ostie. Sa place dans la vie et dans l'œuvre de saint Augustin* (1938) 以来、用語上、プロティノス（以下 Plot. と略記）の *Enneades* 中、特に 1,6（『美につい

て』), V, 1 (『三つの原理的なものについて』)との対応が, Courcelle, Pépin 等の研究者によって指摘され、これら二篇をオステリア体験の緯として想定することが共通の見解となっている。Henry から Pépin に至る研究史において, Plot. との対応箇所をより詳細に同定し, 増加させていく傾向がみられるが, それらは次の三点にまとめられる。すなわち, 1) 上昇の過程, 2) 上昇の過程と内面化の過程の相即, 3) 神探求の究極, に関する叙述である。たとえば, もっとも多くの対応箇所を指摘する Pépin は, <erigentes.....in id ipsum> (24, 5) と <'Αναβατέου...ἐπὶ τὸ ἀγαθὸν οὐ ὀρέγεται> (1, 6, 7, 1), <ascendebamus interiorius cogitando.....> (24, 8—9) と <Δεῖ τοίνυν...καὶ τὸ ἀντιλαμβάνόμενον εἰς τὸ εἶσω ἐπιστρέφειν, κἀκεῖ ποιεῖν τὴν προσοχὴν ἔχειν> (V, 1, 12, 12—14), さらに <attingimus eam> (24, 18) と <αὐτῷ (sc. τῷ ἀγαθῷ) συγκερασθῆναι> (1, 6, 7, 13) 等の対応を挙げるのである。このように摘出された多くの対応箇所をどのようにとらえるべきであろうか。そこに, Aug. の Plot. への依存, ひいては両者の思想上の類似性をみて, はたしてよいであろうか。この問題を考察するためには, *Enneades* 中, ことに V, 1 の内容を検討しておく必要があると思われる。というのも, V, 1 は, 多くの対応箇所が指摘されているのみならず, Aug. 自身が *De ciuitate Dei* 第 X 巻第 23 章においてその書名に言及しており, 少なくともその内容を知っていたと考えられるからである。

V, 1 においては, 『三つの原理的なものについて』という表題が示すように, 主として三つの *ὑποστάσεις*, つまり τὸ ἐν, νοῦς, ψυχὴ が相互にどのような関係にあるのかが, 第 2—9 章にかけて論及されている。そして, それは, 第 10 章において, <ἐν τῇ φύσει> (1.5) にある三つの *ὑποστάσεις* (τριττά) に関するものとしてまとめられている。この場合, *φύσις* に関しては様々に解釈されうるが, 同章では <ἐν τῇ φύσει> にある *τριττά* が <παρ' ἡμῖν> にもあるといわれ (1.6), <ἐν τῇ φύσει> と <παρ' ἡμῖν> とが対応関係におかれているとみることができ。そうすると, <ἐν τῇ φύσει> にある <τριττά> とは, いわばわれわれの外にある超越的実体としての三つの *ὑποστάσεις* をさしているのではないか, と考えられる。しかも, 同章では, われわれの *ψυχὴ* の感覚にかかわらない高次の部分は, *ψυχὴ* でありながら, 自己の直接の起源である *νοῦς* のうちに留まっているといわ

れていることから、われわれの *ψυχή* もまた神的なものだと理解されるのであって (cf. V, 1, 2, 38), このことが〈*ἐν τῇ φύσει*〉と〈*παρ' ἡμῶν*〉との対応の一つの根拠にもなっているといえよう。⁽⁶⁾そして、この内と外との対応を基礎として、第10—12章において、われわれ各自のうちにある *ψυχή* が根源に還帰するためにどのようにすべきであるのかが述べられてくる。ここで、Aug. との関係のみようとする場合重要なのは、Plot. において、われわれも神的なのであって、〈*ἐν τῇ φύσει*〉にある *τριτάκι*〈*παρ' ἡμῶν*〉にもあるとされていることだと思われるのである。

(4)

以上のような V, 1 全体の内容から考えてみると、たしかに、上昇の過程が叙述されている v, 1, 4, 1—5 では、可感界に感嘆しつつ (*θαυμάζειν*), さらに〈*τὸ ἀληθινώτερον*〉である世界へと上昇していかなければならないといわれており、*uia eminentiae* の方途がとられている点に関し、Courcelle,⁽⁷⁾ Pépin が指摘するように、Aug. における上昇の過程との対応が一応みられるといえよう。だが、この点については、先にふれたように、パウロの言葉 (*Rom.* 1, 20) との関連もいいうるのである。

また、上昇の過程と自己の内面への深化の過程との相即という点では、V, 1, 12において、*ψυχή* の根源への還帰に関し、〈*εἰς τὸ εἶσω ἐπιστρέφειν*〉ということが強調されている。こうした自己の内面への志向が絶対者の探求の過程において重視されている限りでは、先にみた *Conf.* 第Ⅶ巻第10章16節冒頭で〈*inde admonitus redire ad memet ipsum*〉といわれていることからしても、Aug. が Plot. から何らかの触発を受けているとみることはできよう。しかし、Plot. の場合、自己の内面への志向が強調されるのは、少なくとも V, 1 においてみる限り、われわれ各自のうちにある *ψυχή* も神的だと前提され、〈*ἐν τῇ φύσει*〉にある *τριτάκι*〈*παρ' ἡμῶν*〉にもあるということに基づいて、*ψυχή* の根源への還帰はいわば〈*παρ' ἡμῶν*〉において達成されうと考えられているからだ、と思われるのである。

以上のような検討をふまえた場合、神探求の過程に関し、先にふれた Pépin のよ

うに、オスティア体験の叙述にみられる〈*attingere*〉と、Plot. における〈*συγκερασθήναι*〉とが対応するとみることには、はたして妥当であろうか。先にみたように、Aug. は、ミラノ体験において、創造者と被造物とは次元を異にし、*enstase* の方途では *supra mentem* に存在する神に達しえないことを自覚した。さらにオスティア体験においても、神に *attingere* したとはいえ、そこには *modice* という限定が付されているのである。しかも、その後、すぐに通常の生活に引きもどされてしまうともいわれている。M. Orphe-Galiard によれば、*attingere* とは、*une possession plénière* を意味する *comprehendere* とは異なり、*une atteinte partielle* を意味するにすぎない。Aug. の *attingere* という体験は、決して *le bonheur éternel* とはなりえないといえるのである。⁽⁸⁾

これに対し、Plot. の場合、*τὸ ἐν* とわれわれの *ψυχή* との関係を表わす言葉として、*θεωρεῖν θεᾶσθαι*、*ὄραν* 等の視覚にかかわるもの、⁽⁹⁾ *συναφή*、*ἐπαφή*、*ἐράφασθαι* 等の接触を意味するものが用いられている。だが、それに留まらず、先の *συγκερασθήναι* さらに *ἐμίγνυτο*、*πάρεστυ*、*συνουσία* 等、いわば *τὸ ἐν* との混合や共在を表わす言葉も用いられている。⁽¹⁰⁾ つまり、Plot. の場合、われわれの *ψυχή* の探求の究極は、*τὸ ἐν* を見、それに触れることに尽きるのではなく、さらに、先にみたようにわれわれもまた神的存在であることにおいて、*τὸ ἐν* (1, 6, 7, 14 では善と同一視されている) といわば一体化することが可能であり、目標でもあると考えられるのである。こうした意味において、Plot. におけるわれわれの *ψυχή* の根源への還帰とは、いわばその自己神化の過程だととらえることもできるのであって、神と自己との懸隔の自覚に基づく Aug. の立場とは根本的に異なると思われるのである。したがって、Pépin が対応を指摘する *attingere* と *συγκερασθήναι* との間にこそ、実は Aug. と Plot. との決定的相違が示されているといえよう。⁽¹¹⁾

さらに、Aug. の場合、神に *attingere* しうるには、神からの恩恵といった何か特別の契機が必要とされていると考えられるのであって、それが24節にみられる〈*toto ictu cordis*〉という表現によって表わされているのではないだろうか。この表現に関しては、そこに Aug. とモニカの能動的働きかけを重視するか、あるいは二人の受動的側面を重視するかによって、⁽¹²⁾ 解釈が分かれている。しかし、たとえば、第Ⅶ巻第10章16節冒頭の *duce te*、第Ⅹ巻第40章65節冒頭の *mecum ambulasti*

が示すように、神探求の過程は、決して Aug. が自力でたどったものではないのであって、この〈*toto ictu cordis*〉という表現に、被造物の側からの能動的働きかけのみをみることはできないであろう。この点で、第Ⅴ巻第10章25節において、*videre* や *attingere* ではなく、「神の声を聞く」というモチーフが、聖書的イメージと共に展開されていることは注目に値する。Plot. のⅤ, 1 末尾においても、Aug. との関連においてはほとんど着目されていないが、「聞く」というイメージがみられる。しかし、Plot. の場合、雑多な音を捨象し、〈*ἀκούειν φθόγγων τῶν ἄνω*〉(Ⅴ, 1, 12, 20) するための、われわれの側の主体的努力がそこでは強調されているのである。これに対し、25節においては、すべてが沈黙した状態のなかで聞こえてくる神御自身の声を聞くことこそが、思惟によっては一瞬の *attingere* という体験にすぎなかった状態が持続し、内的歓喜に引き入れられる不可欠の条件とされているのであって、「聞く」というイメージの使用に、神探求の究極における神からの恩恵の重要性が示唆されているといえるのではないだろうか。そして、神の声を聞くのはいつのことであろうかという問いでオスティア体験が閉じられていることには、大きな意味があるように思われるのである。

註

- (1) A. Mandouze は、*Saint Augustin. L'aventure de la Raison et de la Grâce* (Études Augustiniennes, 1968, p. 697) において、神探求の過程の叙述という点で、*Conf.* にみられるいわゆるミラノ体験、オスティア体験、*Enarratio in Psalmum XLI* を同一線上においてとらえようとしている。後に用いる *enstase*, *extase* という用語は Mandouze の同書から援用した。
- (2) cf. A. Mandouze, *L'extase d'Ostie, Possibilités et limites de la méthode des parallèles textuels*, *Augustinus Magister*, t. I, 1954, pp. 67-84, esp. p. 78, n. I.
- (3) cf. G. Madec, *Connaissance de Dieu et action de grâce. Essai sur les citations de l'Ép. aux Romains I, 18—25 dans l'œuvre de saint Augustin* (*Recherches Augustiniennes*, vol. II, 1962, pp. 273—309).
- (4) P. Courcelle, *Recherches sur les Confessions de Saint Augustin*, 1950; J. Pépin, «*Primitiae spiritus*», *Remarques sur une citation paulinienne des Confessions de saint Augustin*, *Revue de l'Histoire des Religions*,

- t. CXL, 1951, pp. 155—201.
- (5) cf. *op. cit.*, p. 161, n. 1.
- (6) Plot. における〈ἐν τῇ φύσει〉と〈παρ' ἡμῶν〉との対応には、τὸ ἐν の超越と内在の問題を調停しようとする意図が働いていると思われる。
- (7) cf., *op. cit.*, p. 166, n. 1.
- (8) cf., *Dictionnaire de Spiritualité*, s. v. contemplation.
- (9) たとえば, *μηδὲν ὁρῶν, θεάσεται* (V, 5, 7, 32——行数は Henry-Schwyzler 新版による)。
- (10) たとえば, *συναφή* (VI, 9, 8, 27), *οἷον ἐφάψασθαι καὶ θηγεῖν* (VI, 9, 4, 27)。
- (11) たとえば, *ἐμίγνυτο* (VI, 9, 11, 7), *συνουσία* (VI, 9, 7, 23)。
- (12) たとえば, Labriolle は能動的働きかけを重視して〈élan de nos cœurs〉と訳し, Courcelle は受動的側面を重視して〈dans un choc total〉と訳している。
- (13) 「聞く」というモチーフに関しては, 別途検討を要する。cf. P. Courcelle, *Les „voix“ dans les Confessions de Saint Augustin* (*Hermes*, 80, 1952), H. Blumenberg, 生松・熊田訳『光の形而上学』(「余論一眼と耳」)等。